

研究開発課題別中間評価結果

1. 研究開発課題名

高齢者の経験・知識・技能を社会の推進力とするための ICT 基盤「高齢者クラウド」の研究開発

2. プロジェクトマネージャー

廣瀬 通孝（東京大学大学院 教授）

3. 課題の概要

高齢者が獲得した知識・経験・技能を生かして、就労や社会参加を促がしたり、若い人にそれらを継承させたりすることによって、高齢者を社会の推進力とし、高齢者の「生きがい」や自立度の向上、介護負担の低減に繋げることを目的としている。高齢者クラウドは、①「知識取得インタフェース」、②「知識構造化プラットフォーム」、③「知識伝達インタフェース」の3要素からなる。まず、高齢者の多様な身体機能（認知・行動）、行動範囲（場所・時間）を取得し、それらを組み合わせた「モザイクモデル」を作り、次に、最適な就労・社会参加ができるようなジョブマッチングのプラットフォームを構築し、それをベースとした新たなビジネスを通して様々な経済効果を生み出すことを目指している。

4. 評価結果

（1）研究開発の進捗状況と成果の現状

IBMのプラットフォーム技術と東大のインタフェース技術を融合させた2つの中核ソリューション、すなわちロングテール人材用（GBER）とハイエンド人材用（J-Scouter）のジョブマッチングプラットフォームを構築し、実証実験を通してその評価を行っている。特に、J-Scouterについては（株）サーキュレーションに実装し、その有用性を定量的に示すなど具体的な成果をあげている。ただし、GBERについては、既にある人材派遣会社や同様な目的の市販ソフトウェアやデバイスが急速に普及している中で、実施内容の新規性が薄れてきている。また、本課題で提案している時間・空間モザイク就労モデルの有用性は高く評価されてきたが、健康状態をフィードバックしながら社会参加を促すという視点も必要である。

（2）今後の研究開発に向けて

ステージⅢは、企業が主体となるので、GBER とJ-scouter を社会実装しながらそのフィールドを拡大するとともに、ハローワークや人材派遣会社など実際の業務に近い業者の取り込みや、スキルの高い人材に限定せずに幅広いジョブマッチングに展開するなど、新たなビジネス創成の道筋を明確化すべきである。また、シニアの健康指標分析の立場の明確化も望まれる。特に、急増している都市部のサラリーマン退職者の就労支援に対しては、若年層の働き手を前提にしている仕事の分析を行い、高齢者に合った仕事の洗い出しと再構成が急務となる。また、ハイスキル・ロースキルを全てカバーするのではなく、重点領域を決め、ステージⅢの時間内でできることすべきことに絞り込み、高齢者の生きがいや経済への貢献の効果を明確に示す必要がある。

（3）総合評価

本課題の重要性は社会的にも認知されてきており、多くの企業が同じような課題を扱うようになることが想定される。本課題で得られた知見、成果、経験は他企業にとっても役に立つものになり、高齢社会の新しいジョブマッチングモデルとして社会イノベーションに大きく貢献することが期待される。ただし、上述のように、幾つかの課題が残されており、社会実装する上での絞り込みも十分になされるべきである。以上の結果から、総合評価をBとする。